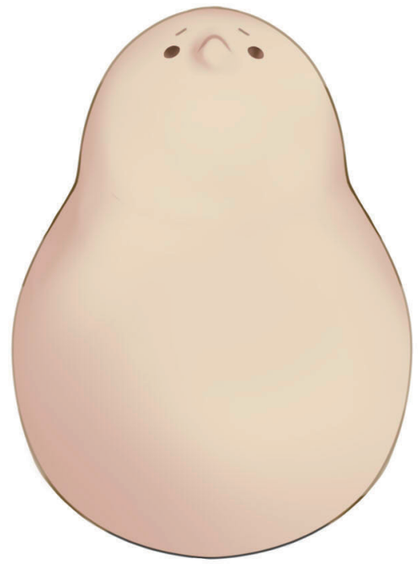
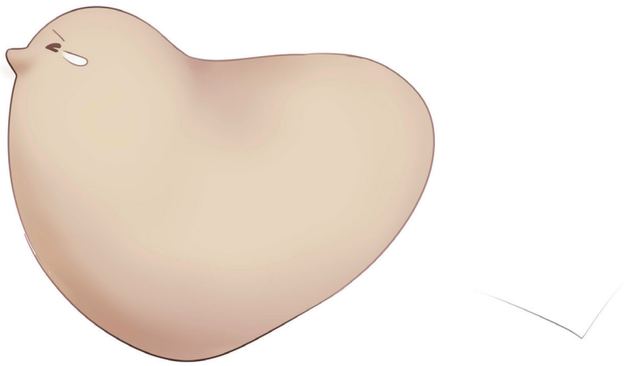
生意気なひよ子には旅をさせろ。

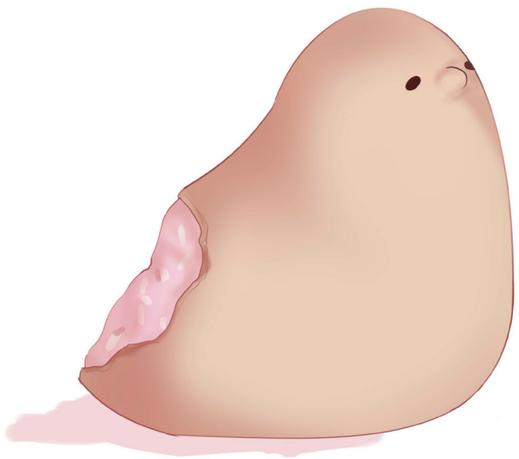


文／江藤綾香
絵／山中紗理奈



ここは、福岡名物「ひよ子」が作られている工場です。
たくさんの「ひよ子」がここで生まれ、
きれいな包みに入って、世に出ていくのです。
だけど、一匹のひよ子はなにやら不満気な表情です。
このひよ子にだけ、目の上にハの字になった
線らしきものがくっきりとみられます。
機械にはなんの異常も見当たりません。
工場長は原因が分からず、困っていました。
ひよ子は言いました。
「ぼくもみんなに食べてもらいたいんです。」
「それはムリばい、ひよ子くん。
君だけみんなと顔が違うじゃない。
これじゃあ、箱を開けた途端に、
食べる人はびっくりするからね」
工場長は首を縦に振ってはくれませんでした。
「僕だって、だれかに食べてもらいたいのに!」
そう言って、ひよ子は外へ飛び出していってしまいました。

ひよ子は、外の世界にびっくりしました。
こんなに強い風を受けたのは初めてだったからです。
ひよ子は慌てて、ある建物に入りました。
これで一安心。と思いきや、
とても大きなクマがひよ子を見下ろしていました。
ひよ子は怖くてその場から動けなくなりました。
だけどクマはじっとひよ子を見つめるばかり。
不思議に思ったひよ子はクチバシで
つんつんとクマの足をつついてみます。
クマはただのぬいぐるみ。そこはおもちゃ屋さんでした。
「かわいい〜〜〜〜!!」
気づくとひよ子は、女の子の手のひらに乗せられてしまいました。
「しかも超あまい匂いするんだけど〜〜〜〜」
ひよ子を取り囲んだ女の子三人組の顔が
どんどん近づいてきます。
食べられる!
ひよ子は怖くなって、ぴょん!と逃げ出しました。
「ウッソ! 動くの!? やば〜〜〜〜い」
そんな声もどんどん遠ざかっていきました。
もう工場からどれだけ離れたことでしょう。
たくさん走って、お腹のあんこも少なくなったようです。
工場長の顔を思いだしたひよ子は寂しくなりました。

とぼとぼと歩くひよ子の目に飛び込んだのは、
満開の桜でした。
この時初めてひよ子は、外に出てよかったと思いました。
緊張がほぐれたひよ子のお腹がぐぅ、と鳴ります。
いい匂いのする桜の花びらを、
ひよ子は思わず食べてしまいました。
桜の甘い味がさらにひよ子の心を癒してくれます。
「おーい。こんなとこにおったとね。」
息を切らした工場長がひよ子を見つけて駆け寄ってきました。
「まさかこんな遠くまで行くとは思わんかったよ、
ひよ子くん。さあ、帰ろう。」
工場長はひよ子を手のひらの上に呼びます。
だけど、ひよ子は乗ろうとはしません。
「だけどぼくは売り物にならないでしょ？
それに食べられそうになって怖かったんです。
ほんとはずっと願っていたはずなのに」
ひよ子の眉はまた下がってしまいました。
「ひよ子くん。僕がどうして
ひよ子を作りつづけているのか、分かるかい？」
ひよ子は首を横に振ります。
「それはね、食べてくれる人の顔を
思い出しながらひよ子を作っているからさ。
おいしいって食べてくれる人がいることを思い出すと、
なんだかこっちまで嬉しくならないかい？
どれ、ぼくが代表して君を食べてあげよう。」
そう言うと、工場長はひよ子のお尻に
パクッとかぶりつきました。
「ピヨッ！」
「もぐもぐ、どんな形でも味は同じだからね、
もぐ、！？こ、これは！？」
工場長は目を見開きました。
「ひよ子くん！　これはどうゆう心境の変化だい？
きみ、いままでにないくらい美味しいじゃないか！」
かじりつかれたひよ子は涙目でした。
「ピヨ・・・そういえばお腹が空いて、
ぼく、ここにある桜を食べてしまったんです。」
「それだよひよ子君！
なんだぁ、君もおいしいものに巡り合えてるじゃないか。
は！　こうしちゃおれん！　急いで工場に戻らなければ！」
工場長はわくわくした表情でひよ子を見つめます。
ひよ子は思いました。
だれかに食べてもらうと、
お腹のあんこが温かくなるような気持ちがすると。

こうして「桜ひよ子」は誕生しました。
ひよ子の味の追求はまだまだ繰り広げられています。
工場の中で、ですけどね。